
滑稽な恋愛。

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滑稽な恋愛。

【Nコード】

N4980V

【作者名】

森永パピ子

【あらすじ】

倅片ゆきひらと、年下の幼馴染の文緒。文緒の双子の妹が失踪して二年が過ぎた。とある月夜の晩に、とうとう綾が帰ってきた。お騒がせな高慢能天気な彼女と倅片のたぶんちょっと滑稽で不真面目な小話。

【もうじきだめになる。】

陽が落ちてずいぶん涼しくなった。八月ももう終わる。蝸が名残惜しそうにひと際高く鳴いた。むっとする昼の暑さが嘘のように、肌撫ぜる風が、ひんやりとしている。じりじりと焦がすような西日がすっかり消え失せ、遠くで鳥の声も聞こえた。

青年はふと辺りを見回した。八畳の和室には一組の布団。散りじりに乱れているのは、清潔だった敷布。

床の間には、白い睡蓮の浮いた薄い鉢が置かれている。花はすでに閉じていた。

白い睡蓮。いくら愛おしく思っても、二度と帰らぬあの日に似ている。

「やあ文緒。元気にしているか」

「倅片さん」

影が差し、硬質な低い声が出た。すらっと引かれた障子から、端正な顔立ちの長身の男が顔を出した。

「おかげさまでね、なかなか鬱々とした日々を過ごしています」

文緒は淡々とした声で答えた。

黒々とした髪を後ろに撫で付け、黒炭染めの浴衣を着た倅片をちらりと見遣る。自分は藍色の蝶が舞う白地の浴衣を着ているのだが、一部の隙もない男ぶりに相手の方がいつそ涼しげに見えた。

「夏祭りもないのに浴衣なんて、滑稽に見えます」

不満を漏らしても倅片はどこ吹く風でニヤリと笑うと、持っていた一升瓶を掲げた。

「時代が悪いだけだ。放っておけ。不満を垂れるわりにおまえ、なかなか似合っているじゃないか」

「あなたが見慣れただけじゃないでしょうか」

「まあそう言うな。夕暮れ見酒と洒落込もう」

懐から黒い笠間焼の猪口を二つ取り出すと障子を明け放ち、縁側に置いた。

「いい家を貰ったな」

「代わりに多くを失いましたけれど」

胡座をかいて庭を見つめる彼の隣に腰掛け、文緒は外に脚を垂らした。

「遺産のお陰で僕は貴族のように優雅な暮らしぶりですよ」

「言うほど幸福そうには見えないなあ。やんごとなきお方よ」

倅片は文緒の方に置いた猪口に酒を注いだ。

「あなたは僕を捨てて置けない？」

「もちろんだ。そう口にするのも恐れ多い」

「嘘つき」

母が旧家の生まれであるらしい文緒は、異国の血が混じっているとかで人並み外れた美貌を誇っている。

幼なじみである彼も初めて見た時には少女かと思っただけだ。

男女の一卵性双生児など珍しいものだった。色白で儂げで潤んだような大きな瞳に扇状の濡れた睫毛。頬は控えめに赤く、唇は果実のようにふっくらとしていた。最近では、頬はこけ青ざめたような顔色をしているが、清廉な美貌にはかわりない。

か細い月にみるその横顔は疲れきっており、瞳は空虚をさ迷っている。家訓に習い、親族に助けられながらも家業を継ぎ、なんとか後継者として活躍していたものの、最近では床に伏せることが多くなった。倅片も補佐役として彼も仕事を手伝っているが、こればかりはどうすることもできなかった。

三年前に両親を亡くし、その一年後に最愛の妹、綾あやが消息を絶った。

綾も美しい女だった。二十になっただがいつまでも幼さの残る、綺麗な。

「倅片さん」

ふいに名を呼ばれ、文緒を見遣る。

「どうした」

「僕の名前を呼んでくれませんか」

「ずいぶん奇妙な頼みだな」

「呼んでください」

その声があまりに切実で、倅片も真顔になり、その名を呼んだ。

「文緒」

「倅片さん、あなたは僕の中に綾が見えますか」

眼を細めて文緒を見た。ひどく痩せこけてはいるが、骨は男のそれで、華奢ではあるが、もう女と見えることはない。かんばせはぞつとするほど美しくはあるが、綾の柔らかな美貌とは違う。

文緒がようやく顔をこちらに向けた。

「あなたは綾ではなく、僕が消えうせればよかったと思っただんじやないでしょうか」

「ずいぶんひどいことをいう」

何度も繰り返し返すやり取り。倅片は酒を流し込んだ。文緒はずいぶん精神を病んでしまったようだ。その思いをかき消さんと。

文緒も黙って猪口を口元に運んだ。

双子といえ、ずっとまえに二人は違いが出ていた。似ているとはいえ造りがまったく異なっていた。自分はずっと傍でそれを見ていたのだと抗議したくなかったが、黙っていた。

倅片は文緒より五つ年上で、彼もまた両親を亡くしていた。父の同志だった文緒の父が優秀な忘れ形見である彼を大学に通わせ、就職まで面倒みてくれた。閉鎖的な双子（とくに文緒）が倅片に心を開いたので、倅片に彼らの傳役の役割を担わせている節もあった。

「倅片さん」

文緒は弱々しい声で彼の袖を掴んだ。

思いの外強い力で引き寄せられ、持っていた猪口からつぎたした酒が零れた。驚いたのはそのせいではない。文緒が年甲斐もなく大

粒の涙を零していたせいだ。

「倅片さん、僕、もうじきだめになる」

幼子のように膝に縋りつき、さめざめと泣く。

「なるものか」

文緒の柔らかくなくせ毛を梳いてやりながら、二度言い聞かせた。

「綾は見つかる。必ず見つかる。だから文緒、おまえは兄らしく気丈に振る舞え」

「だけど、倅片さん」

文緒は顔を上げない。

あの綾が一人で生きているとは思えない。あなたもわかっているはずだ。文緒はそう言いたかったが、口にすれば本当にそうになってしまうのではないかと怖れていた。

「綾は帰る。おまえがここにいる限り」

文緒はその声を、意味を成さぬ音のように思いながら、眠ってしまった睡蓮の鉢をじっと見つめていた。

【滑稽な神隠し】

倅片は、忽然といなくなつた綾のことを、考えた。

月のようにひそやかな文緒に比べて、綾は太陽のように快活で無邪気な性格をしていた。

その明るさは、ときどき無神経さを匂わすほどで、倅片も気を揉むことがあつたが、どちらかといえば人に好かれていた。

膝の上で泣き疲れ、ついには寝息を立てている文緒のほうか、ある種古風な女のようなしつとりとした雰囲気を纏っている。

この双子の中身は男女逆転しているのではなからうかと思う。文緒はああして両親を偲び、妹を思い、泣き暮らしている。しかし、綾は違う。自分を閉じ込めようとする家柄、もとい両親を厭い、儂

げな兄を案じていた。古風な女のような兄と、現代っ子丸出しの妹。どうしたものかと溜息をつく。

文緒が倅片に懐くのも綾は不満そうだった。とうぜん彼女が彼に懐くはずもない。

あどけなく後をついてまわる文緒の後ろから、射るような目でねめつけられた。綾と二人きりになれば、延々といさまに近づきすぎだなんだと文句を言われた。

そんなことが日常茶飯事だった。しかし、決して人前で綾が倅片を詰ることはなかった。両親や近所の大人、文緒の前でさえ、文緒と見分けがつかないほど倅片を慕う幼子を完璧に演じきった。倅平と二人きりになったときにだけ綾は本性を見せるのだった。

『勘違いしないで頂戴。わたくしはただ兄様の為にあなたと関わっているのだから』

八つになったばかりの幼女は倅片を睨みつけながら居丈高に言い放った。倅片はなんとなくそのことを感じ取っていたので驚くこともなく間延びした返事をした。

もう、そんな綾も二十を過ぎた。不毛な兄への恋慕を見切り、鬱屈させる故郷を捨てて都会にでも行ったのかもしれない。

倅片は文緒を揺り起こし、夢うつつの彼を布団に入れてやった。

一人縁側で残った酒を飲みながらか細い月を愛でていると、かさかさと庭の生垣が揺れた。

「猫か？ おいで」

つまみのするめを揺らしながら、裸足のまま生垣に近寄る。

「にあーお」

がさがさと音を立てて飛び出してきたのは、猫にしては大きすぎた。

「あっ」

声をあげようとすると口を塞がれた。酔って油断していた倅片は、自分よりもずつと華奢な身体に組み敷かれた。

「大声だしちゃ駄目。見ない間にずいぶん臍抜けたものね、倅片。」

でも、男ぶりは上がってましてよ」

月夜に照らされた美しいかんばせ。唇に薄く浮かぶ笑みは人といふよりも、男を喰うような妖艶さが滲んでいる。

「なんで浴衣？ 今夜神社の夏祭りでもあったかしら？ あっ
細い腰と手首を掴み、体勢を逆転させる。」

「いままで何をしていた放蕩娘。おまえの兄様はおまえを案じて心身ともに憔悴しているぞ」

綾の耳に唇を寄せ、辛うじて小声で言った。大声を出さないように制したのも、やっと眠った文緒への気遣いだろうと察した。

「碎片つてそんなイイ声してたの？」

首に腕を回し、状況にそぐわないほどあっけらかんとした声で目を丸くする。

「なんの話をしている。おまえなあ、どれだけ文緒がおまえのことを心配していたかわかっているのか？」

「ねえねえ碎片。今わたくしたち、睦みあう男女のような体勢よ？」
「阿呆。くだらないこと言っていないで起きろ」

身体を離そうと上体を持ち上げたが、細い腕がそうはさせてくれなかった。

「碎片。わたくし、どこでどうしていたと思う？」

馴染む程度だがもともと顔立ちのよさをいっそう引き立てている薄化粧に、下着のようなストラップワンピース。どうみても売春婦のようだが、碎片は答えなかった。

「東京で暮らしていたのよ。たまたま買った宝くじ、一千万円が当たったの」

「はあ？」

「ちょっとこれはもう一回冒険しなくちゃって思ってたね。友達の手でエステティシヤンのアルバイトしながら暮らしてたわ」

「そらあともない強運で」

呆れて投げやりになった碎片を再び反転させ、綾は馬乗りになる。
「そうでしょ？ わたくしには神様が味方しているのよ。父様と母

様が亡くなつて、方々から見合い婆どもがわたくしに群がってきて、わたくし嫌だつたから、氏神様にお参りしたの。少しだけでいいから自由になりたいって」

「ずいぶん身勝手な願いが叶つたもんだな、綾よ」

「あら。氏神様だつて美しい娘の願いは叶えてくださるわ」

神をも怖れぬとはこのことだと、倅片は言葉を失つた。

「わたくしを連れ戻そうとした叔父様たちも泣き落として足代でお歸りいただいたし、わたくしは自立を謳歌してついに気づいたの」

倅片の脳裏に副社長と専務の顔が浮かぶ。綾の演説は半分聞き流していた。

「世間には兄様ほど美しいかんばせの殿方はいないし、倅片ほど男前もない。そしてわたくしを束縛するものもいなくなったこの家こそ、わたくしのシャングリラだと」

「綾……」

「なあに？ 倅片」

軽々と綾を抱え込み、倅片は掌に息を吹きかけた。綾の顔が引き攣り、抵抗しようとしたが遅かった。

「いやああっ」

「おまえはどうして昔からそう自分本位なんだ！ 文緒がどんな思いでこの二年間を過ごしたと思つている」

説教をしながら綾の尻を叩いた。居丈高な振る舞いをしていた綾は幼女のように抗議する。

「わたくしだつて籠の鳥のままでは嫌だつたんだもの！ 倅片、わたくしも子供ではありませんのよ！」

じんじんと痛む尻を押さえながら地べたに座り込んで、倅片を睨んだ。

「口答えばかり達者になつて。おまえが大人といえるか」

「この86センチの胸、58センチのくびれ、80センチのお尻が子供のそれに見えて？」

「身体が育つたからって頭が足りてないんじゃないじゃ話にもならん」

崩れた髪を直し、倅片は鼻で笑う。

「わたくしの桃尻を折檻しておいてなんにも感じなかったというの？！」

綾は信じられないといった顔で倅片を責めた。

「今この状況で俺に何を感じると？」

「久しぶりに会った妹と侮っていた美少女が、垂涎の美女となって姿を現したっていうのに、劣情のひとつも催さないなんて、男としておかしんじゃないかって?!」

「俺はおまえの方がおかしいと思っているんだが」

綾は深い溜息を流しながら首を振る。

「まさか倅片が衆道の者だったとは」

「おい、おまえ。勘違いも甚だしいぞ」

「兄様が儂く可憐な麗人だということはこの綾が一番心得ています。倅片の理性が砂のように脆く、風前の灯とはいえ、野獣のように粗野に兄様を蹂躪してしまっただかと思うとこのわたくしの白百合のような心が痛んでならないわ」

「おい、おまえ真正の阿呆だろう。俺の声は届いているのか馬の耳」「いくら愛してやまない兄様が相手とはいえ、綾はもう決めたのです」

凜々しく真っ直ぐに倅片を見据えたかと思うと、すばやく男の手を自らの胸に押し当てた。

「ちよ、おま」

「やは肌の、あつき血汐にふれも見で、さびしからずや道を説く君」
挑戦的な眼差しから目を逸らし、手も振り払い溜息をつく倅片は口を開いた。

「百敷や、古き軒端の偲ぶにも、なほあまりある昔なりけり」

砂埃を払って立ち上がる。綾の手を掴んで立ち上がらせても彼女は俯いたままだった。

「綾。風呂にはいつて服を着替える。おまえの最愛の兄様を安心させてやるんだ」

浴衣の襟を整え俵片は歩み始める。肩越しに綾の小さな嗚咽が聞えた。秋の虫が彼女の声に共鳴しているように聞えた。

(後書き)

「やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」

ここでの意味

【わたくしの熱い柔肌と思いに触れもしないで、真面目くさって説教しちゃってさ。さびしくないの?】

「もしきや 古きのきばのしのぶにも なほあまりある 昔なりけり」

ここでの意味

【たとえ今、見る影がなくなっても、綾にも美しい(純粹な)時代があったことを俺は知ってるよ。あの頃が懐かしいったらありゃしない】

アテクシ大人になっただでしょ?っていつてる綾をまだ子供扱いって
いうか、女としてみてない倅片ってなわけです。わかりにくくてす
んまっせん!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4980v/>

滑稽な恋愛。

2011年8月5日03時19分発行